

# 『日本語教授書』についての考察

蔡茂豊

## 要旨

一八九五年から五一年間、日本は台湾を領有した。その間、異民族の台湾人に日本語教育を施した。『日本語教授書』はそのために作られた最初の教授用書である。当初どうやって異民族に日本語を教えたかがこの本を調べれば判断がつくはずである。惜しいかな、この本は台湾で見当たらず、研究調査の完整が待たされていた。

この度その所在が発見された。筆者はその経緯を述べ、それについて色々な角度から考察し、いかなる特色と時代的意義を持つかをまとめて見た。

## 一、発見のいきさつ

殖民地時代（一八九五—一九四五）、台湾の日本教育について、史的な面から記述された文献が幾つかある。それを次に挙げてみる。

- (1) 『台湾教育史』 吉野秀公著 昭和二年
- (2) 『台湾に於ける国語教育の展開』 国府種武著 昭和六

年

- (3) 『台湾における国語教育の過去と現在』 国府種武著 昭和十一年

- (4) 『台湾教育沿革誌』 台湾教育会編 昭和十四年

- (5) 『台湾教育の進展』 佐藤源治著 昭和十八年

これらの文献をそろえて研究調査を拡げていけば、殖民地時代、台湾における日本語教育の実態が浮かびあがってくるはずである。拙著『中国人に対する日本語教育の史的研究』は、それにもとづいて構成したものだといえる。

上記の文献の中で、日本語教授に際し、使われた教科用書を調べると、『日本語教授書』に関する記載が真先に目につく。なぜなら、この本は、異民族の台湾人に教えるために編纂（さん）された最初の教授用書だったわけであり、日本語教育史における存在は貴重だと言わねばならない。

一九七七年、わたしが上掲書『中国人に対する日本語教育の史的研究』をまとめたが、その時点まで、『日本語教授書』はどこをさがしても見当たらず、

この本は台湾における日本語教育の始めてのテキストであ

り、貴重な存在だが今のところ見る影もなく、願わくば台湾のどこかにこの本が所蔵されていることを祈って止まな  
い①

と結んで研究者としての責任を一時逃れたが、いつもそれを気にしていた。

学位論文としての拙著は図らずも『国語年鑑』（昭和五年度）に取り上げられ、紹介された②。お陰で多人の研究者と文通することとなり、その一人、泉史生氏と知りあうようになった。

泉氏はY.M.C.A.の日本語教師として台湾に派遣され、台湾中部の埔里のY.M.C.A.で日本語を教えるかたわら、殖民地時代の日本語教育に興味を覚え、その研究に没頭している若き教師である。去年教職をやめ、日本教授法の勉強のため、いま日本に帰っている。帰国中の、その泉氏が『日本語教授書』の所在をつきとめ、知らせてくれたのである。

そこで私はこの二月上旬東京に飛び、所蔵せる図書館に足を運んだ。本文はそれについての考察である。

## 二、書誌学的にみた『日本語教授書』

(1) 本書の大きさはタテ十八センチ、ヨコ十一・五センチの洋装本である。③

(2) 内容は「緒言」の外、本文五十頁。

(3) 全文は漢字・片仮名混淆文で綴られている。地の文は漢文訓読体で、例文は明治時代の話しことばで「マス体」である。例を挙げると次の通り。

(4) その他

教師問 ドンナニ アメガ フリマスカ  
生徒答 (知ラザレバ教師之ヲ教フ)

ドンドン ト フリマス

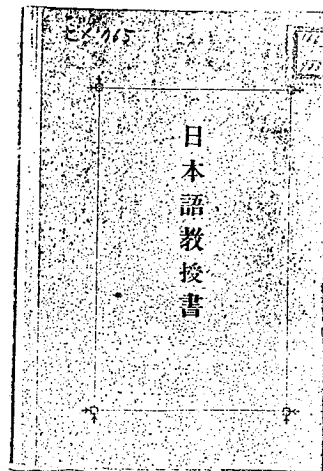


図 (1)

図(1)は表紙そのもので、国府種武著『台湾に於ける国語教育の展開』六十六ページに掲げたものと同じだと知ることができる。

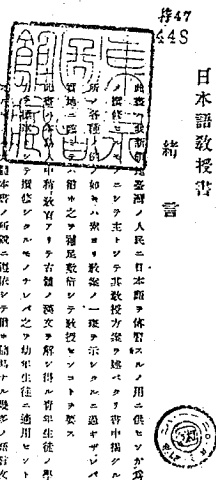


図 (2)

図②には、ハンコが二つ押してある。中上にはタテヨコ各四・五センチの正方形で「東京図書館蔵」と読める。右下には直径二センチの円形に明治「二八、一一、二〇□□」等字が見える。④

奥付には、

明治廿八年十一月十二日印刷

明治廿八年十一月十六日発行

台湾総督府民政局学務部

印刷人 東京牛込区市ケ谷加賀町一丁目廿三番地  
根岸 高 先

東京牛込区市ケ谷加賀町一丁目十二番地  
株式 秀英舎工場  
会社

と刷ってある。十一月十六日に発行した本書が四日間経ずして、「東京図書館」に収蔵されたことが分かる。

### 三、通説の再現

『日本語教授書』に関する通説を次に再現してみる。

(一)『台湾教育史』は、三〇八ページに教科用及び参考用図書として諸書を挙げ、その中に、

図書名

著訳者名

発行年月

|        |          |           |
|--------|----------|-----------|
| 日本語教授書 | 台湾総督府学務部 | 明治二十八年十一月 |
| 新日本語言集 | 同        | 明治二十九年三月  |

など十三種類の書名が見られる。そして、『日本語教授書』と『新日本語言集』は「共に殉難六士の手になりたるものにして、初歩の国語教授に於ける有力なる手引となりしものなり」(同上掲書三一〇ページ)とある。

(二)『台湾に於ける国語教育の展開』は六六ページに、次のことが記されている。

明治二十八年七月十二日学務部が芝山巖に移されるとすぐ部員は国語伝習に従事すると共に、教科用図書の編纂に著手したが、其の努力の結果として出来上ったものが『日本語教授書』と『新日本語言集甲号』である。従って『日本語教授書』の編纂者は芝山巖殉難の六士である。本書の最初に世に出たものは明治二十八年八月三十日であり、此時は一千部を印刷して各地方庁に頒つたものである。今台北第一師範学校にあるものは明治二十八年十一月十六日に発行されたものである。之は八月三十日以後しばしば印刷されたものらしいのである。

(三)『台湾教育沿革誌』は二〇四ページには次のような記載となっている。

日本語教授書

明治二十八年十一月十六日発行。日本語教授の順序、方法、並に文法の一斑を教授する目的で編纂した参考書で、主として芝山巖学堂に於ける教案を基礎とし、古体漢文を解し得る青年を標準としたものである。

上記の通説を国立国会図書館の蔵本と対照したとき、次の論

点を導き出すことができよう。

(甲)『日本語教授書』は六氏先生の編さんによるものだと思  
ていいか。

『日本語教授書』は既述の通り六氏先生の編さんによるとい  
うのが定説になっている。しかし、調査研究を進めていくに従  
って、はてなと思うふしがある。拠りどころは『台湾教育沿革  
誌』二二ページ「学務部員の遭難」の一節である。遭難のいき  
さつを載せた後、二五ページに「当時の学務部員は」、という  
書き出しで次のことが記述されている。

奏任取扱雇員一

伊沢修二

上京中

判任取扱雇員六

戦死 楢取道明

七月廿八日民政部勤務学務部兼  
任、八月十二日内務部へ転任、

九月十六日再び学務部勤務

同 関口長太郎

七月廿九日鳳山支庁詰十月七日  
再び学務部勤務

同 井原順之助

七月十一日内務部より学務部へ  
転任

同 平井数馬

八月廿四日内務部より学務部へ  
転任

同 桂 金太郎

八月十二日拝命  
上京中

山田耕造

判任待遇陸軍通訳一

戦死 中島長吉

七月十五日近衛第四聯隊より学

務部へ勤務

嘱託一

吧 連 徳

傭八

柯秋潔 朱俊英 陳兆鸞 葉寿松 張柏堂 郭廷猷

吳明德 潘濟堂

猶事変前他へ転任した部員は

安積五郎 六月廿四日恒春支庁詰 八月十一日学務

部勤務 九月十二日恒春支庁詰

三宅恒徳 七月廿九日内務部へ転任

井上大策 八月十二日拝命、十月二日恒春出張所詰

(同右二六ページ)

一見何の異様もない記録が、同上掲書の「台湾教育年表」と  
対照した場合、始めておかしいと思わざるを得ない。それを次  
に引用する。

明治廿八年

六月十七日 始政の祝典を挙ぐ

六月十七日 伊沢修二台北着

六月十八日 楢取道明、安積五郎、三宅恒徳、関口長

太郎学務部員に任命

六月廿二日 吧連徳、林瑞廷を通訳に任命

六月廿六日 学務部を芝山巖に移す

七月 五日 柯秋潔、朱俊英を日本語講習候補生に採

用

七月十六日 芝山巖学務部学堂授業開始

八月廿九日 日本語教授書脱稿

九月廿七日 学務部学堂生徒廿七名に達す

十月十七日 芝山巖学堂甲組生徒六名に第一回修業証書授与式を挙行す

十月廿九日 伊沢学務部長及部員山田耕造安平より上京

芝山巖学堂生徒柯秋潔、朱俊英部長に従ひ内地見学

十一月十六日 日本語教授書五百部發行

明治廿九年

一月 一日 芝山巖学務部員六名戦死

一月 八日 戦死者屍体取拾の爲部員芝山巖に出張

二月 二日 新日本語言集脱稿

若し、『日本語教授書』は学務部員が、国語伝習に従事すると共に、「教科用図書の編纂に著手」されたものとすれば、編さん期間は国語伝授の開始された七月十六日から『日本語教授書』脱稿の八月廿九日の約一ヶ月半ということとなる。

しかし、「戦死」した六氏先生の中、この編さん期間だと見られる一ヶ月半、ずっと学務部に勤務していた部員は井原順之助と通訳中島長吉の二名しかない。その他の者は実際の授業と編さんの仕事にどれだけ携わったか疑問である。具体的にいうと、平井数馬は「脱稿」する四日前の八月廿四に、内務部より転任してきた者だし、関口長太郎は授業開始の十二日後鳳山支庁に転出している。楫取道明も八月十二日には内務部へ転出、

桂金太郎は八月十二日に始めて拝命といった状態である。

人事移動のはげしさに、筆者が考えるのは不安定な生活環境の中で、果たしてどこまで落ちついて授業を行ない、『日本語教授書』の編さんに携わったのか、腑に落ちない。

その反対に、安積五郎は八月十一日から学務部に勤務し、九月十二日に転出、三宅恒徳は七月廿九日転出するまで学務部にいた勘定となり、井上大策も八月十二日から学務部に來ていることとなる。

以上述べたことをまとめると、『日本語教授書』は六氏先生の手によって編さんされたのかどうかはつきりすると思う。むしろ、編さんの仕事には協力したであろうが、責任編集者が外にいたのではあるまいか。そして、六氏先生の日本語教育における貢献を美談化するため、編さん者に推したのではなからうか。言いかえれば、転出した学務部員は命拾いをしたかわりに、編さん者としての「資格」を失ったわけである。それから責任編集者までも遠慮して名を伏せたのではあるまいか。⑤『新日本語言集甲号』も六氏の編さんとなっている。「遺稿」だというわけだがこれも同じようにどこまでが真実か疑わしい。

(乙)『日本語教授書』の印刷は明治廿八年十一月十二日で、發行は明治廿八年十一月十六日であることについて

国府氏は「本書の最初に世に出たものは明治廿八年八月卅日であり、此時は一千部を印刷して各地方庁に頒つたものである」と云云せるが「八月卅日」説は何を根拠にしたのか。『台湾に於ける国語教育の過去と現在』を執筆したとき、国府氏が文献として取り上げたのは「十一月十六日版」のものであり、「

八月卅日版」のものを確認したわけでもなかった。氏はなぜ「八月卅日」説をとりあげたのか不解である。

常識から判断して、「八月卅日版」は当時の環境では出せないはずである。というのは、学務部が芝山巖に移されたのが七月十二日で、教えながら編さんされたのが『日本語教授書』である。「教えながら」というのは、試行錯誤によるものだと言者は解釈したい。その「教えながら」、作られた教授書が一個半月足らずの八月卅日に上梓できるか疑わしい。いわんや、領台後間もない台湾には、漢字、仮名まじりの印刷屋はなく、東京に出なければならぬ。事実上「十一月十六日」のものは東京で印刷発行したものである。それから、当時、日本と台湾との交通事情を考えた場合、短期間内に出版できたかということである。もしかすると「台湾教育年表」にある通り、「八月廿九日日本語教授書の脱稿」が「八月卅日印刷」のミスにつながったのでなからうか。

その外、『日本語教授書』の緒言の日付は明治廿八年九月と明記されている点から見て、国府氏「八月卅日版」説はミスだと確言できよう。

(丙) 一千部を印刷して各地方庁に配ったというが如何  
『台湾教育沿革誌』の台湾教育年表にある関連事項を(甲)に記した通り、『日本語教授書』は十一月十六日五百部発行となっている。それでは、国府氏の「一千部印刷」云云はどこに根拠を求めたのだろうか。

同上掲書第一章第五節「芝山巖に於ける学務部の事業」に「学務部報告書」を引用した文がある。次の通りである。

教育の事業は旦夕にして之を能くすべきにあらずれども……吏員執務の余暇を以て言語の伝習に着手せしめしに、土人等好んで之を学習せり。此の如く国語伝習の成績稍見るべきものあるを以て、日本語教授書といへるものの編輯の事を稟申し、許可を得て一千部を印刷に付せり。既に宜蘭支庁其他より、日本語伝習の方法に付続々教示を求めるものに対し之を配付し漸次教育の効果を収めんとせり(同上掲書十八ページ参照)

国府氏の根拠が上記の「学務部報告書」によるものであるとすれば、五百部と一千部とはどちらが正しいかということになる。「台湾教育年表」は台湾教育会が昭和十四年につくったもので、「学務部報告書」は領台当初の学務部の記録である。どっちをとるかである。

六氏先生の遺骸收拾のため、一月八日に伊能嘉矩を始めとする学務部員四名が芝山巖に派遣された。その報告書が『台湾史料』に原稿のまま明治廿九年一月廿三日の項にとじられている。その中に回収された『日本語教授書』は二二五冊とあるから、各地に配られたものの残りともみられよう。

(丁) 『日本語教授書』はテキストか。

読んで字の如く『日本語教授書』は教授書であるからテキストではない。前掲書「台湾教育沿革誌」にも「参考書で、主として芝山巖学堂に於ける教案を基礎とし」たものだとしてある。

『日本語教授書』がテキストではない証拠に、全書五十頁に廿三個所の「注意」事項が記され、教授法を明記している点か

ら見て分かる。

国語伝習所規則第二十条には、『日本語教授書』は教科書と参考用書のリストに入っているが、教科書なのか、参考書なのか、はっきりしない。しかし『日本語教授書』の内容によって、当時の教授内容と進度はある程度までうかがえる。

(戊) 領台当初の教科用書は日本で印刷

領台当初、台湾人に教える日本語教科書は明治廿二年に出版され、日本国内で使われていた『小学読本』とそれにもなう『小学よみかき教授書』などであった。そして『日本語教授書

』が明治廿八年十一月十六日真先に台湾総督府学務部より東京で出版されるわけだが、それに引き続き、出版されたものも、殆ど日本国内で印刷、発行されたのである。そして、台湾に新聞社がつくられ、活版社ができてから徐々に台湾に移されたと見られる。

それゆえ、領台当初の教科用書は日本国内の図書館に収蔵されている見通しがつき、明治卅二―三年ごろからは少ないとこの度の研究調査で判断がついた。次にそのリストをつくってみた。

台湾総督府出版公学校教科用書及び参考書

| 図 書 名                   | 発 行 日          | 発 行 者           | 印 刷 所 | 所 蔵 図 書 館      |
|-------------------------|----------------|-----------------|-------|----------------|
| 小学よみかき教授書<br>(上)<br>(下) | 明廿二・五<br>明廿二・七 | 文部省<br>同 右      |       | 教研・東書<br>教研・東書 |
| 小学読本                    | 明廿二・十          | 同 右             |       | 教研⑥            |
| 日本語教授書                  | 明廿八・十一・十六      | 台湾総督府民政<br>局学務部 | 秀英舎工場 | 国会・東書・東大       |
| 新日本語言集 甲号               | 明廿九・二・十一       | 同 右             | 同 右   | 台湾分館・国会・東書     |
| 小学読書教授指針                | 明廿九            | 台湾総督府民政<br>局文務部 | 同 右   | 教研             |
| 小学読方作文掛図教授指針            | 明廿九・十一・廿一      | 同 右 学務部         | 同 右   | 教研・東大・東書       |

|   |                                    |                   |                   |                |
|---|------------------------------------|-------------------|-------------------|----------------|
| 台湾十五音及字母附詳解                                       | 明廿九・十一・十四                          | 同 右               | 同 右               | 東大・天大・台湾分館     |
| 国語教授参考書<br>一(初学生徒教案)<br>二(小学読本卷之一訳稿)<br>三(動詞教授資料) | 明廿九・十二・四<br>明廿九・十一・廿七<br>明廿九・十二・十三 | 同 右<br>同 右<br>同 右 | 同 右<br>同 右<br>同 右 | 東大<br>東大<br>東大 |
| 台湾適用会話入門  | 明廿九・十一・卅                           | 同 右               | 同 右               | 東大・天大・東書       |
| 台湾適用国語読本初步上卷                                      | 明廿九・十一・卅                           | 同 右               | 同 右               | 東大・台大・東書       |
| 台湾適用作法教授書   | 明廿九・十一・卅                           | 同 右               | 同 右               | 東書・東大          |
| 台湾適用書牘文 (上)<br>(下)                                | 明卅・三・廿<br>明卅・三・廿                   | 同 右<br>同 右        | 同 右<br>同 右        | 国会・台湾分館・東書・東大⑦ |
| 台湾適用書牘文教授書 (上)<br>(下)                             | 明卅三・二・廿八<br>明卅・十・一                 | 同 右<br>同 右        | 同 右<br>同 右        | 国会・台湾分館・東大⑧    |
| 日台小字典   | 明卅一・十二・十三                          | 同 右               | 同 右               | 国会・台湾分館・東書・天大  |
| 台湾適用対訳公用文例  | 明卅二・二・廿八                           | 同 右               | 同 右               | 台湾分館・東大        |
| 台湾公学読本 卷1   | 明卅三・三・廿五                           | 同 右               | 同 右               | 東書             |
| ゴアン氏言語教授方案  | 明卅三・七・六                            | 同 右               | 同 右               | 台大             |
| 台湾公学校国語教授要旨                                       | 明卅三・十二・十八                          | 同 右               | 同 右               | 東大             |



|                     |          |     |         |             |
|---------------------|----------|-----|---------|-------------|
| 国民読本参照<br>国語話方教材 卷1 | 明卅三・十・十五 | 同 右 | 台湾日日新報社 | 東大          |
| 同上 卷2               | 明卅四・六・七  | 同 右 | 台湾活版社   | 東大          |
| 台湾教科用書<br>国民読本卷一〜六  | 明卅四      | 同 右 | 台湾日日新報社 | 台湾分館・東書・東大⑥ |

※国会図書館 東書 東京書籍文庫 東大 東京大学図書館 台大 台湾大学総図書館 台湾分館 中央図  
書館 台湾分館 天大 天理大学図書館⑥ 明 明治

右表から、台湾にないものが日本国内に収蔵されていることに

につながるのではなからうか。

#### 四、『日本語教授書』についての考察

##### 1. 「緒言」からみた『日本語教授書』

一、此書ハ我新領地台湾ノ人民ニ日本語ヲ伝習スルノ用ニ供センガ為メ撰修セルモノニシ主トシテ其教授方案ヲ述ベタリ書中掲グル所ノ各種ノ例ノ如キハ素ヨリ教案ノ一斑ヲ示シタルニ過ギザレバ実地ニ臨ミテハ猶ホ之ヲ補足敷衍シテ教授センコトヲ要ス

上記の内容からみて分かる通り、本書は異民族の台湾人に教える日本語の教授用書であり、主としてその教授方案を述べたものである。教案は各種の例を挙げただけにすぎず、教えるときには、補足が必要とすると明記している。

その後を追って、「台湾日日新報社」が明治卅一年五月一日に発刊、明治卅三年から『台湾教科用書国民読本』を印刷している。新聞社の外に、台北松浦屋、台北活版社の名前が明治卅三年から目にちらつく。

なお余談だが、伊沢修二氏は明治廿八年六月八日に『日清字音鑑』を「秀英舎」から出している。これは後日台湾総督府学務課の教科用図書が殆ど「秀英舎」から印刷発行していること

一、此書ハ本島人中稍教育アリテ古体ノ漢文ヲ解シ得ル  
青年生徒ノ学力ヲ標準トシテ撰修シタルモノナレバ  
之ヲ幼年生徒ニ適用セントスルモノハ大体本書ノ所  
説ニ遵依シテ猶ホ簡易ナル幾多ノ語言文辭ヲ交エ徐  
々ニ進学セシムルヲ要ス

本書の学習対象を「青年生徒」ときめ、編さんの規準を  
あきらかにしたものと解せる。そして「幼年生徒」に使わ  
れる場合は本書の所説に遵依する方法をさとしてゐる。

一、此書ノ主旨ハ全ク日本語ヲ本島人ニ教フルニ在ルヲ  
以テ其訳語ハ務メテ日本ノ語法ニ率由セシメタリコ  
レガ為メ時ニ土言又ハ漢文ノ典則ニ不馴ナルヲ致ス  
ハ亦止ムヲ得ザル所ナリ。

本書は教授用書なるがため、訳語は日本人教師の判読を  
考慮に入れたものであることが分かる。

## 2『日本語教授書』の主な内容

本書は「語学初歩」「日本文法」「字音変化」の三部か  
らなっている。本文五十ページの中、

初学初歩 一〜卅三ページ<sup>⑬</sup>

日本文法 卅五〜四五ページ

字音変化 四五〜五十ページ

というように分割されている。

(A)「語学初歩」について

「語学初歩」の内容を挙げると次の通りである。

音声(五十音、濁音、次清音、拗音) 一〜四ページ

数字

四 ページ

代名詞

動詞

動詞の「時化法」

名詞+動詞の「話文」

「常言」と敬辞

名詞+動詞の「連用言」

名詞+名詞

二つの文を一つの「話文」にする

会話篇

各項目の占めるページ数の少なさに目がつく。内容は諸  
言に記した通り「一斑」の例を挙げただけに過ぎない。

それを詳しく説明すると、音声を教えた後に、音節の応  
用として「アイ・エ・ウエ・ウオ・アキ・オケ・イケ等の  
単語を授け、その単語に相当する漢字を傍書してその意味  
を悟らせる方法をとっている。例を次に挙げてみる。

愛<sup>アイ</sup> 柄<sup>エ</sup> 上<sup>ウエ</sup> 魚<sup>ウエ</sup> 秋<sup>アキ</sup> 桶<sup>オケ</sup> 池<sup>イケ</sup>

それから、「常言と敬辞」だが、ここでは常体と敬体を  
さすことにとどまっている。敬語を指すまでにはいかない。

其例 ウル(常言) ウリマス(敬辞)

カウ(常言) カイマス(敬辞)

クウ(常言) クイマス(敬辞)

そして「注意」事項には、「日本語ニ於テハ敬辞ト常言  
トノ別ヲ教フルコト甚ダ緊要ナリ」と述べ、「此処ニ於テ  
ハ前ニ常言ニテ教ヘ置キタルモノヲ敬辞ニ改メ敬辞ニテ教

ヘタルモノヲ常言ニ復セシムル練習ヲ為スヲ要ス」とある。  
連用言と名詞＋名詞は説明するまでもないことだが、一歩進んだ「二つの文を一つの話文」にする練習の後に会話篇に入る。

ただ会話篇といっても「コレヨリ以下本部編輯新領地用会話篇ニ基キ学生ニ適當ナル会話ヲ作りテ之ヲ授ク」とあるように、あくまでも用例会話に止どまり、別に適當な会話を作つて授けることになっている。実例は次のようなものである。

○イヤダ（イヤデゴザリマス）

○ハイレ（オハイリナサイ）

○ホシイ（ホシウゴザリマス）

アツイカラ サンポ ハ イヤダ

ココエ ハイレ ドーゾ オハイリ クダサイ

フデ ガ ホシイ メシ ガ ホシイ（二十ページ）

会話篇の内容をみると、どうも中心となるテーマがないように思われる。たとえば上記の「いやだ」「はいれ」「ほしい」の三語を選んだ目的と、三語の間にはなんのつながりがあるか分からない。

しかし、文型を中心にしたいくつかの用例が見える。

○イソゲ

モット イソゲ

セイ イッパイ イソゲ

アメ ガ フッテ クルカラ イソゲ

ゼニ ヲ ヤルカラ イソゲ

ヒ ガ クレル カラ セイイッパイ イソゲ  
（十九～二十ページ）

○トレ

ソノ チャワン ヲ トッテ クダサイ

アノ ハナ ヲ トッテ クダサイ

ボー ヲ トレ

カサ ヲ トレ（廿三ページ）

○カケ

コノ カミ ニ オカキ ナサイ

タイワン ゴ デ カキ マシヨール カ

ニホン ゴ デ オカキ ナサイ

カンジ マジリ デ カキ マシヨール カ

カナ デ ヨロシイ（卅一～卅二ページ）

ただ、今の時点で検討した場合、おせじに言つても、つくられた例文はうまいとは思えない。もっと実用的で、いいことが選べられるはずだと思ふのは筆者だけではなからう。

（B）日本文法について

「コンニチ カラ ニホン プンテン ノ タイリヤク

ヲ オシエマス」からスタートした「日本文法」は、まず名詞・代名詞・動詞・関係詞を実例で紹介し、関係詞（て

・に・を・は）の重要性を説き、

ハナ ムカウ 不成文句。書ハナ ニ ムカウ 始成文句

ハナ トル 不成文句。ハナ ヲ トル 成文句

というように、助詞の文における役割を示した。それから

各品詞を組みあわせた会話文をつくり、常体と敬体とに分けて練習させる方法をとる。

次に形容詞、副詞、感歎詞を紹介し、上記の方式と同じように会話文をつくり、常体と敬体の使い方を教える。例  
えば、

例(一) アオ クサ クロ イヌ オオ カワ タカ  
ハシ

ケイヨージン ハ メイシ ノ ウエ ニ フゾク  
シテ モノ ノ ケイシヨール アワハス

コトバ デ アリマス

アオ クロ オオ タカ ナド ノ ルイ ハ

ケイヨージン デ アリマス。

次に形状言の比較法をとりあげ、

其例 アノ ヤマ ハ タカイ

コノヤマ ハ アノヤマ ヨリモ タカイ

ムカー ノ ヤマ ハ イチバン タカイ(ムカ

ーはムコーのミスカ)(四三〇四四ページ)

というように学ばせる。なお練習のため、他の話し文を作  
らせる。

其例 キヨー ハ アツイ

キノー ハ キヨー ヨリモ アツカッタ

オトトイ ハ コノゴロ デュー デ イチバン

アツカッタ(四四ページ)

(C) 字音変化について

「ハヒフヘホノジハワイウエオノオンニナルコトガアリ

マス」に始まり、字音の変化を一つ一つとりあげ、例をそ  
えて理解させている。たとえば

例 アウ アフ ワウ オウ ハ オート ヨミマス  
チウアウ コクワウ オウタイ

のように、廿二種類の字音変化を紹介し、例をあげている  
点にその特色が見られる。そして日本国内では依然として  
歴史仮名遣いを使っていたから、字音変化による読み方を  
列挙し、熟習させて、後に続く「尋常小学読本ノ教授ニ移  
ルベ」く苦心して編さんされていることが汲みとられる。

## 五、『日本語教授書』の特色

(一)なんといっても、外国人のために書かれた最初の日本語教  
授書である。

日本語を外国人に教えるといった歴史は古いが、政府機関  
がこれを主宰し、そのために編さんされた教科用書は『日  
本語教授書』が始めてである。日本語教育史における意義  
は大きい。

(二)全書に廿三ヶ所の「注意」事項が記され、教授要領を挙げ  
ている。その教授要領の一つ一つは今日の日本語教授法に  
も適用するものが多く、頭が下がるのみである。

例 1.

〔注意〕初メテ日本語ヲ教フルニハ古来ノ字音仮名遣上  
等ニ拘ラズ一定ノ仮字ヲモツテ一定ノ音ヲ表スルノ法ニ  
依ルヲ要ス即上ノ例ニ於テ「上」ハ「ウエ」ト書シテ「  
ウヘ」ト書セズ「魚」ハ「ウオ」ト書シテ「ウヲ」ト書

セザル類ナリ（上掲書2ページ）

例2.

〔注意〕……略……又ジンリキシヤ等ニ人力車等ノ漢字ヲ傍書シテ教フルハ必ズ仮名ノミニテ十分発音ニ熟シタル後ニ於テスベキコトヲ忘ルベカラス発音ニ熟セザル前ニ漢字ヲ教フルハ害アルモ益ナシ以下此規則ヲ格守スル要ス（同上四ページ）

例3.

〔注意〕……前略……故ニ初学者ニ日本語ヲ教フルニハ最初ヨリ常言ト敬辞ト、別ニ注意シ之ニ習熟セシムルヲ要ス……下略……（同上十二ページ）

例4.

〔注意〕文法上ノ学習ハ初学者ニハ甚ダ困難ニシテ更ニ其旨味ヲ感ゼザルモノナレバ時々此例ノ如キ容易キ会話ヲ交ヘ厭倦ヲ来サザシムルコトヲ務ムベシ  
どの一つを取り上げても、現在の日本語教授法における要領となら変わらないものである。

(三) 歴史仮名遣いの時代に逆らった表記法。

九十年前、歴史仮名遣いが罷り通っていた時代に、字音にそった表記法を使ったことは、今の時点から考えるとシャッポを脱がざるを得ない。

単語の例

ジンリキシヤ キンジョ ジョシ（拗音）  
チューギ・ショーチ・リョーシン（長音）

短文の例

ワタシラ ハ イッシヨ ニ ハシリマシヨ  
イーエ ドーイタシマシテ

ココエ ハイレ ドーゾ オハイリ クダサイ

キョー ワタシ ハ アソコ エ ユクコトヲ

ヤクソクシマシタ

上例から見れば分かる通り、副助詞の「ハ」を除けば完璧に近い表音主義である。

(四) 百年來の日本語の變化が分かる

『日本語教授書』の会話文から、この百年間日本語はいかに変わったかということと生活の狀態がうかがえる。

例：

ワタシ ガ ユキマス（五ページ）

アレ ハ ニカイ ニ アガリマシタ（十ページ）

テン ガ クモッテ アメ ガ フル（十六ページ）

ワタシ ハ パチナ ニ カエリ マシテ ホンヲ

ヨミマシヨ サクジツ ハ アメ ガ フリマシテ

コンニチ ハ ハナ ガ キレイ ニ サキマシタ（

十六ページ）

イクキン ニ サキマシタ（十六ページ）

イクキン コメヲ カイマシタカ

ジッキン カイマシタ（十七ページ）

イクラ デ クツヲ カイマシタカ（十八ページ）

セイイッパイ イソゲ（十九ページ）

ゼニヲ ヤルカラ イソゲ（廿ページ）

ダイスキ デ ゴザリマス（廿六ページ）

コンニチ ハ アメ ガ フリマセンカラ カサ ハ  
イリマセンサヨ（廿七ページ）

ワタシ ハ イマ ヨー ジ ガ アリマスカラ アナ  
タ ハ ザンジオマチナサイ（廿七ページ）

ニホンゴ ノ カナ ニ ハ フタイロ アリマス  
ヒト イロ ハ カタカナ デ ホカノ ハ ヒラガ  
ナ デ アリマス（卅一ページ）

ワタシ ハ ホンゴク エ カエル ツモリ デ  
オリマス イツ シユツ タツ ナサリマス カ（卅  
七ページ）

スコシ タヅネ タイ コト ガ アルカラ コイ  
ソレナラ マイリ マシヨ（四十ページ）  
オトトイ ハ コノゴロ チュー デ イチバン  
アツカッタ（四十四ページ）

(五) 分ち書きについて

例文はみな分ち書きになっているが、単語別になっており、  
文節まで発展していないことがわかる。また随所に矛盾が  
あり、当時の語の認定が一定していないと見られる。例を  
挙げると次の通り

ハナ ガ サイ テ イル

テン ガ クモッテ イル（十四ページ）

ドンナ ニ アメ ガ フリマスカ

ドンドン ト フリマス（十八ページ）

アレ ト コレ ト ハ ドチラガ ヨイ カ

（廿四ページ）

タイワン ゴ デ カキ マシヨ（カ

ニホン ゴ デ オカキ ナサイ（卅ページ）

ニホンゴ ラ カクコト ガ デキルカ

カタカナ デ カクコト ガ デキ マス（四二ページ）

(六) 上下尊卑の考え方を意図的に植えつけている

日本語教育を通じて、官民、上下、尊卑の考え方を植えつ  
けるように仕組まれている意図が見受けられる。

例：

官員ト人民トノ対話ニ托シテ常言ト敬辞トノ使方ヲ教  
フ

コチラ エ コイ

ナン ノ ゴヨード ゴザリマスカ

スコシ タヅネ タイ コト ガ アルカラ コイ

ソレナラ マイリ マシヨ（同上掲卅九、四十ペ  
ージ）

次ニ左ノ如キ会話ヲ授クコレ亦貴人ト生徒等トノ会見  
ニ托シテ常言ト敬辞トノ使方ヲ教フルモノナリ

オマエ ノ ナ ハ ナン ト イフカ

ハン コー チョ ト モーシ マス

トシ ハ イクツカ

ジウ シチ サイ デ ゴザリマス（同上掲四一、

四二ページ）

教授書全体の内容からみて、随所に「常言」と「敬辞」の  
おきかえを強調しているのにも拘わらず、「官員ト人民ト  
ノ対話ニ托シテ」「貴人ト生徒等トノ会見ニ托シテ」を強



(b) 二語併用法は領台間もなくして使われた

『日本語教授書』の出現で判明したのは、二語併用法のスタートした時期である。言いかえれば『日本語言集甲号』に対訳の台湾語と八声記号が付記され、使われ始めたところに二語併用教授法が始まったと見られる。時は明治廿九年二月と見ていいかと思う。しかし『日本語教授書』にも併用とまでは行かないが、既に台湾語対訳が使われている。例えば、

(注意一)……上略……前記ノ如ク漢字ヲ傍書シ而テ之ヲ左ノ如ク台湾語ノ組立ニシテ其訳ヲ教フベシ以下之ニ准ゼヨ

(一)(二)(三)(四)等前項参照

(一)我去 (二)与我 (三)与我花

(四)(我)送汝花(日本語ニテハ我ノ字ヲ略スルコトヲ説明スベシ)

(五)与我汝的花

(六)(我)送汝我的紙

(注意二)此ノ如ク台湾語ニ訳スト雖モ決シテ之ヲ其儘写シテ誦読セシメズ必ズ日本文ニ漢字ヲ傍書シタル前、例文ニ就キテ土語ヲ口訳セシムベシ……下略……

とあるように対訳について云云していることが分かる。ただ、「(注意二)」のように「そのまま写して誦

## 付記

読せしめ」てはならなく、「口訳せしむべし」とある。これよりして、確言できることは、台湾における日本語教育は、スタートからまず口述による対訳法を使い、そして間もなく「二語併用」を記載したテキストを使ったものと見受けられる。

## 注釈

本文の作成に当たり、日本調査訪問には財団法人交流協会の御支援によった。厚く御礼申しあげる次第である。それから文献調査には、国会図書館、国立教育研究所、東書文庫、東京大学図書館から色々便宜を計らって下さった。併せて謝意を述べたい。

①拙著『中国人に対する日本語教育の史的研究』二三七ページ参照。

②『国語年鑑』(昭和五五年版)卅八ページ参照

③『旧植民地関係刊行物総合目録——台湾——』(アジア経済出版会)に東大図書館所蔵の『日本語教授書』は「和装本」とあるが、洋装本のミスだといえる。(同上掲書十八ページ参照)

④「東京図書館」は国立国会図書館の前身であることは、『国立国会図書館三十年史』六五五―六五九ページを参照。

⑤台湾教育史七六ページ「芝山巖懷旧録」に、『日本語教授書』にふれ、「之に従事したるは、伊沢先生及部員楨取道明…



：の諸氏なり」とある。

⑥小学読本には巻一と巻二があるが、使われたのは巻一だけか。因みに『国語教授参考書』（二）は『小学読本巻之一訳稿』とある。つまり『小学読本巻二』は使われていないことか。

⑦国会図書館蔵の『書牘文』（上）は明治卅・六・廿五発行台北台一活版所の印刷とあり、（下）は明治卅・十・一発行で、台湾日報社の印刷となっている。これは版本の違いを示すが、総督府出版公学校教科用図書及参考書の年度別では、明治廿九年度となっているから、もっと早い版本があるはずである。

⑧台湾適用書牘文教授書（上）（下）はともに明治卅年度の総督府出版図書となっているから、（上）の明治卅三年二月廿八日は初刷ではないこととなる。（下）巻は明治卅年十月一日だから、（上）巻も同日期かそれ以前の出版発行と見ていい。

⑨台湾分館は巻一と巻十二あり、東書文庫は『台湾公学校読本巻一』と『国民読本』巻二と巻六まである。東大図書館は『国民読本巻一と巻五』となっている。

⑩表は『日文台湾資料目録』（台湾中央図書館）、『旧植民地関係機関刊行物総合目録』（アジア経済出版会）『明治期刊行図書目録』（国会図書館）『教育文献綜合目録第三集』（東書文庫）によるものである。それから、それぞれの蔵書に筆者は目を通した。

⑪『大日本印刷』のパンフレットによる。

⑫『台湾日報三十年史』一ページ参照。

⑬三四ページは空白となっている。

## 参考文献（文中引用順）

- |                        |               |       |
|------------------------|---------------|-------|
| 『日本語教授書』               | 台湾総督府民政局学務部   | 明治廿八年 |
| 『台湾教育史』                | 吉野秀公著         | 昭和二年  |
| 『台湾に於ける国語教育の展開』        | 国府種武著         | 昭和六年  |
| 『台湾における国語教育の過去と現在』     |               |       |
| 国府種武著                  |               |       |
| 『台湾教育沿革誌』              | 台湾教育会編        | 昭和十一年 |
| 『台湾教育の進展』              | 佐藤源治著         | 昭和十四年 |
| 『中国人に対する日本語教育の史的研究』    |               | 昭和十八年 |
| 蔡茂豊著 自家版               |               | 一九七七年 |
| 『国語年鑑』                 | 国立国語研究所 秀英出版社 | 昭和五五年 |
| 『新日本語言集甲号』             | 台湾総督府民政局学務部   | 明治廿九年 |
| 『台湾史料原稿』               | 台湾守備混成第一旅団    |       |
| 司令部編                   |               | 明治卅三年 |
| 『台湾日日三十年史』             | 台湾日日新報社       | 大正十四年 |
| 『日文台湾資料目録』             | 中央図書館台湾分館     | 一九八〇年 |
| 『東書文庫所蔵教科用図書目録』        | 東書文庫          | 一九七九年 |
| 『旧植民地関係機関刊行物総合目録——台湾』  |               |       |
| アジア経済出版会               |               | 一九七三年 |
| 『大日本』（英文版）             | 大日本印刷広報課      | 一九八六年 |
| 『教育文献綜合目録第3集』（国立教育研究所） |               |       |
| 栄光社                    |               | 一九六七年 |
| 『明治期刊行図書目録第2巻』         | 国会図書館         | 一九七二年 |
| 第4巻                    | 国会図書館         | 一九七四年 |